

春秋会

ニュースレター

2025.1



今月の予定

・ 1/17 (金) 12:00

幹事会

・ 1/29 (金) 19:00

新年会兼副会長当選祝賀会

各派若手会対抗ゴルフのご報告

河野哲平(71期)

4位(令和元年)→5位(令和2年)→4位(令和3年)
→2位(令和4年)→4位(令和5年)→今年は???

令和6年11月30日(土) 奈良若草カントリー倶楽部において、各派若手会対抗ゴルフが開催されました。

春秋会若手会からは6名が参加しました。

(参加者は、佐伯紀明会員、村本健司会員、船越智晴会員、西祐亮会員、久井大輝会員、河野哲平です。)

4位(令和元年)→5位(令和2年)→4位(令和3年)→2位(令和4年)→4位(令和5年)と、どちらかといえば低迷していた春秋会の順位は?



(当日は絶好のゴルフ日和でした)

2024 年度 広報委員

- ・河野雄介（60期、委員長）
- ・小野順子（57期、担当副幹事長）
- ・西原和彦（55期）
- ・堀川智子（57期）
- ・溝上絢子（57期）
- ・浦寛幸（59期）
- ・松尾洋輔（59期）
- ・広瀬元太郎（60期）
- ・柳勝久（61期）
- ・山田寛子（65期）
- ・金星姫（66期）
- ・木場晶子（67期）
- ・田村瞳（67期）
- ・板崎遼（67期）
- ・吉留慧（68期）
- ・高一成（69期）
- ・根本俊太郎（70期）
- ・足立敦史（71期）
- ・村本健司（71期）
- ・河野哲平（71期）
- ・才木晴幹（72期）
- ・中岡さつき（72期）
- ・中西教子（72期）
- ・久井大輝（73期）
- ・佐々木崇人（74期）
- ・神澤鈴子（74期）
- ・今野敬文（76期）
- ・小林悠人（76期）
- ・永田駿（76期）
- ・山口謙都（76期）

結果、**春秋会**は**準優勝**を勝ち取りました!!!

次回こそは優勝できそうです!!!



(団体戦準優勝の立役者となった**個人準優勝**の村本会員)



(初参加の久井会員は堂々の**個人6位**)



(春秋若手会の参加メンバー)

佐伯会員は今回も春秋若手会を引っ張りました!

船越会員、西会員も、準優勝に貢献!!

団体戦は白熱しましたが、春秋若手会の参加メンバーは、各々、他会派の若手会の参加者と和気あいあいとしたプレイを通して親睦を深めました。

若手会のみなさま、次回のご参加をお待ちしております!!

以上

ひと月一島、国内航路全制覇への旅(17)

～鹿児島県:加計呂麻島～

広瀬元太郎(60期)

新年あけましておめでとうございます。

しばらく島めぐり記事を休んでいたが、久しぶりに書くことになる。大東島から季節は半年進み厳寒の候であるが、夏の南の島の話が続く。読者諸兄には、気分だけでも暖かくなっていたきたい。



【地理院地図】

さて、二次離島という語句がある。あまり聞かない語句だが、wikipediaにも出てくるし、公文書にもたまに出てくるらしい。意味は、「離島からしかいけない離島」である。離島の離島ともいえる。日本には島は数あれ、二次離島となるとかなり数が絞られてくる。二次離島が一番多いのは、石垣島周辺の離島である、昨年本稿で紹介した西表島、黒島、小浜島は、石垣島の二次離島に該当する。なお、沖縄本島は離島とは考えないらしく(島の定義における狭義説)、狭義説を前提とすると、那覇からしか行けない南北大東島(前回記事)は、二次離島にはあたらない。その他、沖縄本島周辺の慶良間諸島等も気分的には「離島の離島」ではあるが、二次離島ではない。

九州と沖縄の間に奄美大島を中心とする奄美群島がある。奄美大島以外に、北から、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島と大きめの島が並んでおり、それぞれ、それなりの規模があるので、鹿児島からの飛行機の直行便があり、二次離島ではない。いっぽう、奄美大島の南の端に、加計呂麻島、与路島、請島という島がある。これらの島への交通は、奄美大島の南部の古仁屋(こにや)という港からの船便に限られる。つまり二次離島である。

大東島から帰った3週間後の7月24日、加計呂麻島を訪問した。頻繁である。筆者は仕事をしているのかと、心配する読者もいるかもしれないが、週一で交通事故紛争処理センターのあっせん委員も務めており、心配は不要である。

加計呂麻島に渡るためには、まず奄美大島に行かなければならない。大阪から奄美大島には、一般的には飛行機を利用する。直行便もJALとLCCの両方がある。奄美大島の空港は島の北部にあり、加計呂麻島に行く船が出ている古仁屋港は島のほぼ南端にある。奄美大島は、北方領土と沖縄本島を島に含めない説(再狭義説)を前提とすると、佐渡島に次ぐ面積ナンバー2の大きさを誇り、奄美空港から古仁屋まで70キロもある。

実は奄美大島には、数限りなく来島したことがある。前に在籍した事務所で、奄美大島の事件を多く担当させていただいた関係で、何回かわからないくらい来たが、訴訟期日や依頼者の打ち合わせに忙殺されていたので、あまり観光はしていない。独立した後は奄美には行っていないので、10年ぶりの訪問である。今回は、奄美大島の中心地名瀬に滞在し、奄美を観光したい。加計呂麻島もその一環である。名瀬では街の中心から少し離れた「山羊島ホテル」というホテルに宿泊した。ホテルには、ヤギが2匹いる。



2024年7月24日、名瀬から車で古仁屋に向かう。加計呂麻島には、瀬相と生間という港があり、古仁屋と二つの港の間をフェリーが行き来している。便数は瀬相行きが一日4往復、生間行きが一日3往復であり不便である。しかし、それ以外に海上タクシーというものがあり、1時間に1本程度の頻度で、瀬相と生間を結んでいる。海上タクシーは、漁船を改造した程度の大きさであるから、自動車は乗せられない。

加計呂麻島は、二次離島ながら、かなり大きな島で、端から端まで、道路距離で35キロほどある。この距離は、大阪—神戸間の距離に匹敵するので、徒歩での観光は無理である。今回は、二輪の乗り物が苦手な配偶者が同行しているので、自転車も困難だ。さらに、フェリーに車を乗せると、往復で8000円くらいかかる。片道30分、往復1時間の距離で8000円を払うのは、なんとも割高感がある。そこで、奄美大島で使用しているレンタカーは、古仁屋港に置いて、加計呂麻島で別のレンタカーを借りることにする。二次離島訪問で、この

ような自動車問題は「あるある」で、フェリーに自動車に乗せるより、二次離島側で二次的にレンタカーを借りる方が安くつく。同様の問題は、西表島等、石垣島周辺の島に行く場合や、礼文島や利尻島など、北海道の離島に行くときに起こりうる。加計呂麻島のレンタカーは一日3500円くらいであった。

古仁屋港に車を停めて、海上タクシーの「源丸」に乗ることにする。海上タクシーは、「源丸」と「ていご丸」というのがあるようだ。おそらく、船主は「源」姓か、ファーストネームが「源治」もしくは「源治郎」と考えられる。「源太郎」の可能性もあり親近感がわく。源丸の乗り場は、フェリーターミナルから少し離れた、人に場所を聞かないとわからない所にあった。他の漁船に混じって停泊しているので、どれが源丸かわかりにくい。よく見ると、「源」と大書した船がいた。海上タクシーは、加計呂麻島や古仁屋が属する瀬戸内町の観光協会のHPに載っているの、適法に旅客営業をしていることは間違いないが、同HPによると、出航時刻が「10時頃」となっており、「頃」の射程が不明確で、早発もありえるのか?などと、鉄道の世界ではありえない時刻表示で戸惑う。



古仁屋港の水は底まで見えるくらいに透明で、黄色や青の熱帯魚が群れている。写真を見る限りでは、爽快な感じであるが、午前10時でありながら、とてつもなく暑い。源丸は、我々初老の夫婦と20代の女子旅4人組を乗せて、古仁屋港を出港した。天気は快晴で、海の色はエメラルドグリーンから紺碧に変わる。当然のことながら、女子旅4人組は、映える写真を撮りまくっている。やはり、南の島は晴天でなければならない。

ところで、このような能天気な雰囲気のある場所であるが、奄美

大島本島と加計呂麻島間の海峡(大島海峡)は、軍事上重要な場所である。複雑な海岸線と波静かな湾は、軍艦の停泊に適しており、特に、先の大戦においては、沖縄、台湾、南洋諸島防衛のための拠点であった。また、末期には特攻艇の基地でもあった。沖縄に近いので、第二次世界大戦末期の悲惨な話のおいがる。

30分ほどで、生間港に着。2つある加計呂麻島のターミナルなので、そこそこの集落があると思ったが、フェリーの待合小屋くらいと家が数件あるだけの場所であった。空き地に車が何台か停まっており、レンタカー業者の唯一の従業員にして社長のお兄さんから、適当な手続きで車を借りる。車は古びた軽自動車であるが、そんなことはどうでもよい。

とりあえず、もうひとつの港である瀬相に向かって走ってみることにする。島の道は狭く、両側で一車線しかない場所も多い。スピードが出せないの、島内の移動には時

間がかかる。峠と入り江と小さな集落を何度も繰り返すと瀬相に着く。生間よりは栄えており店舗もあるが、小さな集落であることは変わりがない。集落の規模には不相応に大きい徳洲会病院がある。徳洲会病院の創設者である徳田虎雄元衆議院議員は、隣の徳之島の出身である。ライバルである保岡興治元衆議院議員と奄美群島二分した争いをするなど、毀誉褒貶のある人物ではあるが、徳之島から大阪に出て、阪大医学部を卒業し、日本中に病院を展開したという点で、奄美の誇りとなりうる人物なのであろう(異論があればすみません)。



次に、古仁屋の「ご自由にお取りください」パンフレット棚から取った案内図にある「タカテルポイント」に向かう。なにやら、ダイビングのポイントみたいな名前であるが、美しい海が見える絶景ポイントのようである。瀬相のまあま近くにある花富集落と西阿室集落の間にある峠のことである。西阿室は「にしあむろ」でよいが、花富は「けどみ」と発音する。花富までは、普通の細い道であったが、花富からは、道路上に枝や落ち葉が散乱する悪路になる。

地図では、峠を越えて西阿室につながっている道であることは判明するものの、本当に通れるのであろうか。奄美は毒蛇ハブの島であるし、藪に突入して車を展開させたりするのもちょっと怖い。引き返そうかと迷っているうちに、峠と思われる場所に到達した。場所を示す看板もなく、単に道路が少し広がっている地点に過ぎない。しかし、絶景であることに間違いはなかった。海は、砂浜の白から、サンゴ礁特有のエメラルドグリーンそして青のグラデーションとなって、そこに一艘の小舟が浮かんでいる。小舟には、原田知世ではなく老人が乗っていたが、筆者の頭の中の「天国に一番近い島」は、こういうイメージである。遠くに、隣の徳之島も見える。ここまで来てよかった。しかし、なぜこの場所が「タカテルポイント」なのかは現在でも不明である。

観光は終わりにして、海でシュノーケリングをする。最初に着いた生間港の近くの「スリ浜」という地点が推奨されている。南の島の美しいサンゴ礁でシュノーケリングをするのは、とても楽しく有意義であるが、結構シュノーケリングで水死する人は多い。おおむね被害者は、初老者または老人である。自己認識年齢と客観的な体力の乖離が大きいため、この年齢層におけるレジャー上の事故は多い。筆者も思い当たる節がある。死なないために絶対必要なものは、ライフジャケットである。これさえあれば、大概はなんとかなる。しかし、貸しライフジャケット店があるような場所は限られるので、つい、ラ

ライフジャケット無しでやってしまうのだろう。筆者は、そのようなリスクを避けるため、マイライフジャケットを、阪急東通り近くのダイビング専門店で購入して持ってきた。安全は確保されたが、荷物がかさばるのが難点である。LCCだと、ライフジャケットのために追加料金を払わされそう。



スリ浜は、ビーチから 25 メートルも沖に出るとサンゴ礁が展開している。極彩色の熱帯魚やサンゴ、海底で口を半開きにしている貝などを長時間眺めているうちに、自分も魚みたいに、いくらでも泳げると錯覚してしまうし、長時間顔を上げないので、思いのほか沖まで行ってしまったりする。このようなことも、事故の原因になるのだろう。

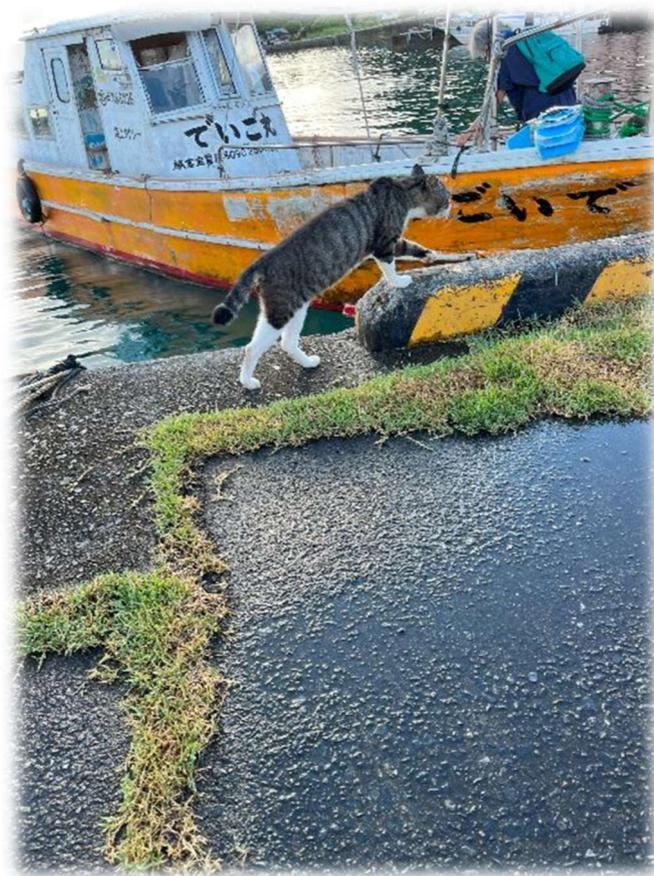
浜に上がって休憩をしていると、スリ浜の簡易な栈橋に、源丸のような船が横付けされ、大量の中国語をしゃべる人たちが降りてきた。二次離島の名もない集落までインバウンドの波は押し寄せている。おそらく、彼らは、古仁屋で船を

チャーターし直接スリ浜までやってくるのだ。通貨の力の違いはおそろしい。

スリ浜の道路沿いには、2件ほどの簡易な宿と食堂がある。南の島の浜辺のレストランには、サーフィンまたはダイビングをしながら働いているお兄さんやお姉さんが必ずいる。半分くらいの確率で関西なまりの方もいて、当方が関西なまりで「ピザとコーラ下さい」というと、「大阪からですか」などと話しかけてくる。筆者の居住地は尼崎なので大阪ではないのだが、そんな話面倒なので適当に流して、大阪ということにしておくと、「私は枚方です」等の返事が戻ってくる。

お兄さんは、今年は台風が一回も来ていないので水温が高く、このままではサンゴが死んでしまう。台風が来て水をかき回してくれないと大変なのだ、という趣旨のことを説明する。台風が来て、奄美大島がめっちゃくちゃになっている映像をテレビで見ることが、来るべきものが来ないのも問題なのだ。このお兄さんは、ダイビングをするらしい。マイライフジャケットを持っている筆者たちに、仲間の匂いを感じたらしく、「スリ浜」がいかに素晴らしいか熱弁してくれる。

旅に出ると(特に島)よく出会うのは、このお兄さんのように、まず大好きな趣味があって、それを楽しむために居住地と職場を決めるタイプの人である。筆者もふくめ読者諸兄は、先になりたい仕事を決め、そのために趣味を犠牲に勉強をして今日があるという、対極の生き方をしている。もちろん、安定収入の問題や移住者同士の確執など、お兄さんなりの苦勞は相当あるはずで、そっちの生き方にただ単に憧れるという中学生のような短絡的な思考はとらないが、こういう人生の選択もあったのではないかと、今からそういう生き方にシフトしていくのもありなのか等じっくりと考えるが、そのうち、さっきの中国人または台湾人が店に入ってきて騒々しくなって、思考は中断する。



すでに日も傾いてきたので、車を返して古仁屋に帰ることとする。レンタカー屋の社長兼従業員は加計呂麻島の人で、最近インバウンド需要が旺盛なためレンタカーはいつも満員だ。外国人向けに民泊を計画中であると楽しそうに話していた。生まれた島に留まりつつ、新しい仕事を開拓するという生き方もある。ただ、経営計画は固めにやったほうがいいと思う。

帰りは海上タクシーではなくフェリーに乗る。フェリーが港を離れたころ、

行きの源丸に乗っていた女子旅4人組が、レンタカーで港に到着した。このフェリーが最終便で、事態は深刻なはずではあるが、それほど慌てた感じもしない。小心者の筆者なら耐えられないところであるが、このような生き方もある。実際の所、その辺の漁師さんに頼み込んでお金を払えば、何とかなるんだろうとは思う。

終

執行部だより

副幹事長 河野豊(かわの ゆたか)(49期)

皆さん、あけましておめでとうございます。

今年度もあと3か月、行事も残り少なくなり、来年度の準備を進めているところです。

政策委員会がお贈りする第3回企画は公益通報です。昨年は鹿児島県、兵庫県、警視庁と、公的団体を舞台として公益通報者が深刻な被害に遭った大事件が頻出し、今の日本が暗黒国家であることを証明してしまいました。弁護士会は古くからこの問題に関わり、相当の努力を重ねてきた筈なのですが、昨年の結果を見ると暗澹たる思いをせざるを得ません。弁護士会が全力を挙げて取り組まなければならない喫緊の重大課題となっています。

春秋会では、先進的な取り組みをしてきた会員を講師に迎えて、警鐘を鳴らす企画を実施しますので、是非とも参加してください。

ところで、昨年12月20日に春秋会定時総会が開催されました。

定時総会では、松井淑子大阪弁護士会副会長からの会務報告と、春秋会各委員会からの活動報告がなされました。

会務報告では、弁護士会が深刻な問題を抱えていること、執行部が真摯にかつ精力的に問題解決を図っていること、その中で春秋会推薦の副会長が大活躍されていることがよく分かりました。

委員会からの活動報告では、多数の企画を精力的に行ない、若手の参加者も多数に及んでいることが可視化されましたが、その割に総会に参加する会員が少ないことが気になりました。この点は今後の課題です。

上記報告の他、次年度の春秋会幹事長と大阪弁護士会副会長候補者が選任され、終了後に懇親会が開かれました。

春秋会幹事長には黒田愛会員が選任されました。これは大阪弁護士会副会長経験者が順当に選任されるのですが、黒田会員は能力、人柄ともに正に適任ですので、次年度のご活躍が大いに期待されるところです。

他方、大阪弁護士会副会長候補者には私、河野を選任していただき、ありがとうございました。私の抱負等については、また別の機会にお話しさせていただきますが、ご協力のほど、よろしくお願いします。

以上



あとがき

広報委員会では、会員の皆様から原稿を大募集します。ぜひ、ご連絡ください。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

などありましたら、以下のアドレスにご連絡ください。

広報委員長 河野雄介 y.kono@swlaw.jp